

伝統工芸

村上の特徴的な2つの伝統工芸品は、対照的な郷土の歴史を表している。

緻密な細工と深紅の色合いが特徴の**村上木彫堆朱**は、藩主の庇護を受けながら職人たちが働いていた城下町・村上の歴史を思い出させる。江戸時代（1603年～1867年）、村上藩士たちは江戸で学んだ木彫りの技術を天然漆の産地である本藩に伝えた。その結果、専門職人が段階を踏んで、上級武士や僧侶、豪商のために皿や花器、調度品などの装飾品を制作する伝統が生まれた。

木地師はまず、耐久性の高い朴の木や栃の木を成形し、彫師へと渡す。彫師はさらに成形し、装飾的な文様を彫り込むこともある。その後、漆職人が何層にも漆を塗り重ねる。そして、木炭、砥石の粉、水を混ぜたものに浸した馬毛のブラシで、漆の自然な光沢を艶消しに磨き上げる。その後、彫師はさらに細部を彫り、品物は透明な漆を一枚塗って仕上がる。この手間のかかる工程は現在でも職人たちに受け継がれ、長持ちする、艶消しの表面が摩耗するにつれて漆特有の光沢が少しずつ戻る製品になる。

村上木彫堆朱は装飾品に端を発するが、現在ではコップや箸、汁椀など日常使いの器にも

その技術が地元の職人たちによって生かされている。

一方、**羽越しな布**は、武家社会の優雅さとはかけ離れた環境で生まれた。有史以前から羽越地方（現在の新潟県北部、山形県、秋田県南部）の辺境の村々では、シナノキの韌皮（樹皮の内側の繊維）から布を作っていた。村人たちは6月から7月初旬の梅雨の時期に

シナノキの木から繊維を取り出した。その後、灰汁で煮て米ぬかに浸して繊維を柔らかくし、秋の空気の中で乾燥させた後、手で糸を引き出して布に織り上げる。

しな布は伝統的に衣服や、人々が森から木の実やベリーを持ち帰るための粗い袋に使われていた。現在では、職人たちがこの素材をペンケースや名刺入れ、財布、帽子など、さまざまなおしゃれな小物に仕立てている。